豊かな経験と学びを保障する環境の充実

ー道徳性・規範意識の芽生えを育む保育（環境構成や教師の援助）の在り方ー

福岡県福津市立神興幼稚園
園長　田中　一郎

Ⅰ　本園の概要

本園は、福岡市と北九州市の中間にある自然と文化・歴史に恵まれた、最近では住みよい街としても脚光を浴びている福津市にある唯一の公立幼稚園です。現在は４歳児１クラス、５歳児２クラスの園児７２名の小規模な幼稚園である。
「明るく、伸び伸びと活動し、心身ともに健康で優しい子供の育成」を教育目標に掲げ、公立幼稚園のよさ（魅力）を生かした保育に努めている。また、豊かな保育内容の創造に向けて、隣接する神興小学校、近くにある福岡教育大学との連携にも力を入れている。

＜三つの魅力＞

①経験豊かな教師が園児一人一人を大切にした保育に努めているアットホームな園
②公共機関・小学校・地域・家庭との連携を推進し、豊かな体験活動と人との交流を大切にしている開かれた園
③子育て・教育についての相談機能の充実に努めている子育て応援の園

Ⅱ研究主題設定の理由

教師との信頼関係に支えられた幼稚園で友達と関わる中で、幼児は様々な気持ちの調整を行っていく。そのような中で、喜びや葛藤など多様な感情体験をし、相手に対して思いやりの気持ちをもったり、してよいことや悪いことが分かったりして、他者と心地よく生活する力を付けていく。また、友達と十分に関わって展開される幼稚園生活において、自分の感情や意志を表現しながら、時に自己主張のぶつかり合いによる葛藤を通して、互いに理解し合う体験を重ねる中でこそ道徳性・規範意識の芽生えが育まれていく。

本園の実態から、様々な人・物・こととの触れ合いを大切にしていくために近年では、隣接した小学校と計画的に幼小連携を行ったり、保育園や、地域の方との交流を始めたりしている。このような日々の園生活や園内外の人・環境を大切にしながら、道徳性・規範意識の芽生えを育む保育の在り方を考え、本主題に取り組むことは意義があると考える。

Ⅲ　研究の目標

幼児の道徳性・規範意識の芽生えの姿を捉え、どのような力が育つかを明らかにした上で、さらに、幼児の道徳性・規範意識の芽生えを育んでいくための保育(環境構成・教師の指導・援助)の在り方を究明する。

Ⅳ　研究の方法

①遊びや活動の中で、幼児のどのような姿が見られたときに道徳性、規範意識の芽生えが育ったと言えるのか、エピソードを抽出して分析し、教師間で協議を重ねていく。
②道徳性や規範意識の芽生えを培うための環境構成や教師の援助の見直しや改善を行う。

Ｖ　研究の視点

幼児の道徳性・規範意識の芽生えの姿を本園の子供たちの実態から分類していくと「５つの姿」

(１:気付く・２:共感する・３:葛藤する・４:問題を解決する・５:触れ合う)に分けることができた。これらの「５つの姿」を基に、子供たちの「道徳性・規範意識の芽生え」を分析していき、研究を進めることにした。また、「５つの姿」に重点を置き保育を進めていくには、どのような援助や環境構成が有効かを具体化していく。

＜「５つの姿」の解説＞

【１:気付く】
幼稚園で遊んだり生活したりする中で、他者の存在に気付いたり、自分や友達、皆で使う物の大切さに気付いたりしていく姿。また、集団生活や遊びの中できまりごとやルールがあること、してよいことや悪いことを知る姿。動植物に触れる中で、命の大切さに気付く姿。

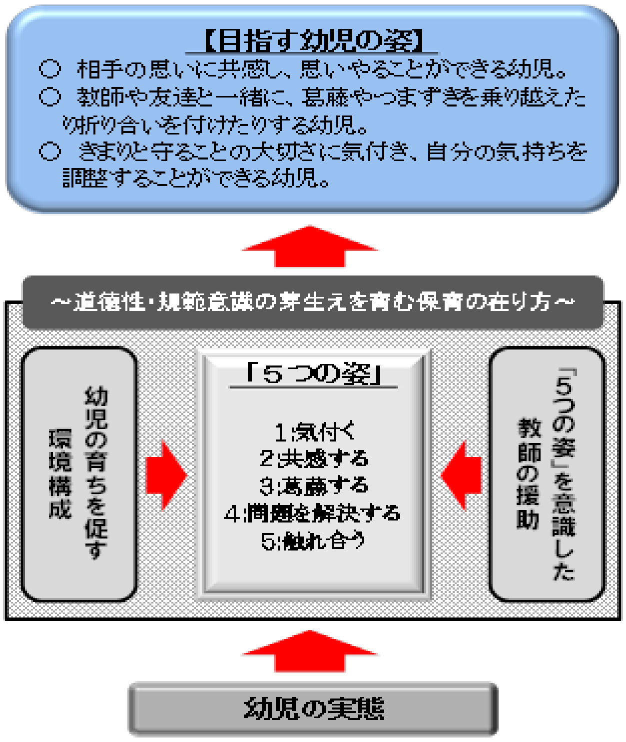
【２:共感する】
友達と同じ目的で遊ぶ中で、相手と同じような気持ちになったり、同じように感じたりする姿。また、自分の経験を思い出したり相手の話を聞いたりする中で、相手の気持ちを感じ取り、心配したり喜んだりする姿。動植物と触れ合う中で、愛着をもつ姿。

【３:葛藤する】
遊びや様々な活動の中で、友達とトラブルになった時、自分の気持ちと相手の気持ちとの間で悩んだり、考えたりする姿。飼育・栽培している虫や植物など、大切にしていた物が弱ったり死んでしまったりした時、その出来事や気持ちと向き合う姿。様々なことに挑戦していく中で、思い通りにならないときに、どうしたらよいか考える姿。

【４:問題を解決する】
ルールを決めたり守ったりすることの大切さに気付き、園生活の中で互いに気持ちよく過ごすためにはどうしたらいいか考え、行動しようとする姿。思うようにいかないことに対して、それを乗り越えようとする姿。

【５:触れ合う】
様々な人の存在に気付き、一緒に遊んだり、会話をしたり、教え合ったりする姿。また、信頼関係を築いていく姿。
生き物（虫、動物、植物など）を見たり、触ったり、世話をしたりする中で関心をもったり、愛着を感じたりする姿。

研究構想図



Ⅵ　エピソード

○　道徳性・規範意識の芽生えの姿を見取り記録する。

「がんばってるね！」　　　　５歳児　９月

負けず嫌いで、自分の思いを押し通そうとすることが多かったＡ児は、周りの友達が先に竹馬に乗れるようになり悔しい思いをしていた。Ａ児は練習を続け、友達や家族に応援されながら、竹馬に自分で乗れるようになった。

９月中旬のある日、運動会に向けて、多くの幼児が竹馬や登り棒に挑戦していた。竹馬に対して消極的だったＢ児が、初めて自分から練習していた。教師が「Ｂ君が竹馬に挑戦しているよ」とＢ児のがんばっている様子を周りの友達に知らせる

と、近くで見ていた幼児が①「Ｂ君がんばれー」と声援を送っていた。Ａ児は「Ｂ君がんばりようやん」と駆け寄り、②竹馬を支えて手助けをしようとした。Ａ児は、「もっと倒して」、「こうするんよ」と実際にやって見せるなど、ずっと練習に付き合っていた。小雨が降り出しても、２人は練習を続けた。その二人を見ていた③Ｃ児とＤ児は、練習している二人が濡れないように、傘を差し掛けていた。

【「５つの姿」の読み取り】

① 友達ががんばる姿を見て、Ｂ児の気持ちを大切にしようと声援を送っている。

→視点１：気付く姿

② Ａ児は、自分が挑戦した時の経験から、Ｂ児の姿に共感し、教える姿。

→視点２：共感する姿、視点５：触れ合う姿

③ Ｃ児とＤ児は、Ｂ児のがんばりたい気持ちとＡ児の教える姿に共感し、自分ができることを考え、助けようとしている。

→視点２：共感する姿・視点５：触れ合う姿

Ⅶ　実践事例

○ 「５つの姿」を具体化し、道徳性・規範意識を育む上で有効な環境構成や援助を明らかにする。

「お化けレストランで遊ぼう」　４歳児１月

≪事例の背景≫

お店ごっこで、年長児が作っていたお化け屋敷で遊んだ体験から、「お化け屋敷を作りたい」、「たんぽぽ組で作ったらいいんやないん？」と周囲の幼児が集まって話していた。しかし、数名の友達同士で好きな遊びをする姿は見られていたが、大勢の友達と一緒に同じイメージをもって遊んだり、またその中で、役割を見付けて遊んだりする姿は見られなかった。

≪幼児の活動≫

お化けの洋服を作りたい　１月２１日～

Ａ児がお化けのお面や洋服を作り始め、周りで見ていた幼児も「私もお化けになりたい」、「作りたい」と言い始めたため、教師が材料となる新聞紙や色紙などを準備した。その後作り始めたＢ児が突然泣き出した。お化けの洋服作りに失敗したため悔しくて泣いていることを、教師が周りの友達に代弁すると、①「どうしたん」、「作ってあげるよ」と友達を心配し声を掛けたり、作ってあげたりする幼児がいた。

① 視点２
（共感する姿）

お化け屋敷を作ろう　１月２８日～

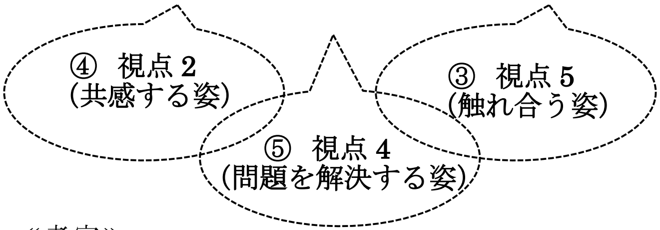
Ｂ児が「お部屋を暗くしてお化け屋敷を作りたい」と提案してきたため、教師と共に材料を選びながら準備していった。部屋の電気を消したＣ児と、②他の遊びをしていたＤ児は「暗くせんで」、「暗くせんとお化け屋敷じゃないもん」と、意見がぶつかった。しばらく教師が見守っていると、③Ｄ児が、「半分半分にしたら」と提案した。Ｃ児も、「じゃあ、お客さんが来たら、電気消すってことね」と答えた。

② 視点3
（葛藤する姿）

② 視点２・４
（共感する姿・
問題を解決する姿）

お化けレストランで遊ぼう　　　　　１月３１日～

お化け屋敷の近くに、数名の幼児が「お化けレストラン」を始め、料理を作って遊んだ。その後、教師と共に落ち葉などを拾ってきて、「お化けスープ」を作って遊んだ。また、帰りの集まりの時に、教師が幼児と一緒に遊びを振り返ると、その中で、④「レストランをお化け屋敷の中でしたい」、「いいね」、「お化けが来てお客さんをおどかしたらいいんやない？」と、自分の考えを伝え合った。次の日、⑤レストランにお客が来ると、お化け役の幼児が「わあー」と出てきてさらに関わりが広がった。⑥E児は椅子を並べ、「ここに座って待っててください」とお客に声を掛け、順番に待ってもらうことを思い付き、役割を見付けて遊んだ。



≪考察≫

○幼児の遊びの姿や言葉を抽出して、エピソードや事例として記録し分析することで、道徳性・規範意識の芽生えがどのように育くまれていったかが明確化された。（全体）

○お化けの衣装やお化け屋敷に必要な材料を、幼児と共に、十分な種類や量を準備したことで、お化け役が増え、関わって遊ぶ姿が増えた。このことから、教師が幼児の興味や関心・思いに応じた環境を準備すれば、共感したり葛藤したりする姿が多く育つことがわかった。（環境）

○活動を進めていく中で、話し合いの場や十分な時間の確保を行い、思いを共有し合えるように見守っていくことで、折り合いを付けたり、ルールを決めたりして遊ぶようになった。このことから、豊かな時間の保障の中で、個から集団へ学びの広がりが生まれ、「規範意識・道徳性の学び」がさらに深まることが分かった。（援助）

○意見のぶつかり合いなど、幼児が問題に直面した時、幼児間で解決できるように教師が共感・見守り等の非指示的指導を行うことが、問題を解決する姿につながり効果的だった。（指導）

Ⅷ　成果と課題

成果

○目指す幼児の姿に向かって研究を進めてきたことで、教師間での目指す幼児の姿を具体化し、共有することができた。

○２年間の保育による体験の積み重ねによって、問題解決する力の高まりがみられた。

【解説】

下の分析表から分かるように、４歳児では【視点１:気付く】と【視点２:共感する姿】が多かったことに対して、５歳児では、視点１，２の姿に加え、【視点４:問題を解決する姿】が 10.7%増えている。また、【視点２:共感する姿】は、４歳児の方が多く見られた。このことから、園内で豊かな経験を重ねていく中で、問題を解決する力が身に付いていることが分かった。

エピソード内の視点の分類表

視点	1	2	3	4	5
４歳児	**7 (25.0)**	**11 (35.7)**	4 (14.3)	4 (14.3)	3 (10.7)
５歳児	7 (29.2)	7 (29.2)	1 (4.2)	**6 (25.0)**	3 (12.5)

単位　個数 (%)

○教師が「５つの姿」を引き出す援助を行うことによって、幼児が自分たちで折り合いを付けながら、問題を解決していく力の育ちを生み出す方法が明確化された。

課題

○　４歳児と５歳児の道徳性・規範意識の芽生えをより具体化し、円滑につなげていくための教師の援助や環境構成の在り方をさらに究明する必要がある。